

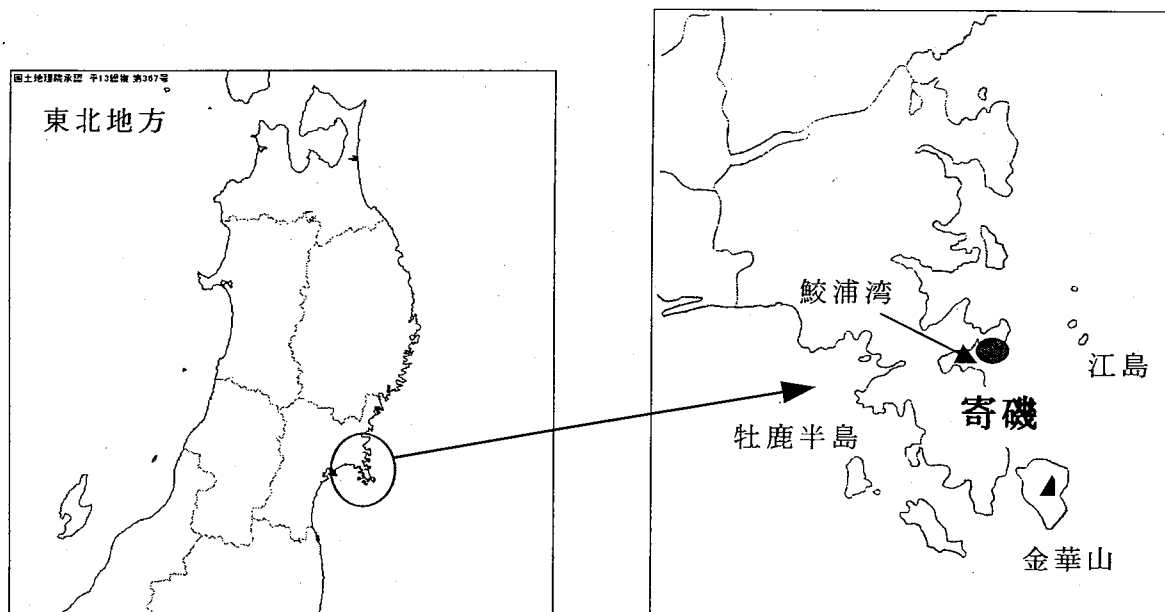
とどけ！寄磯からの浜のメッセージ！！
～海に負担をかけない漁業を目指して～

寄磯漁業協同組合女性部
部長 遠藤 幸子

1 地域の概要

私達の住む寄磯は宮城県にある牡鹿半島の東端に位置し、岩手県から続く三陸リアス式海岸の最南端にある鮫浦湾に面している(図1)。東を望めば遙か沖には風光明媚な「江島」が、南を望めば霊験あらたかな「金華山」が眺望でき、大自然に恵まれたゆっったりとした時間が感じられるところである。寄磯地区には現在99世帯、450人が生活しており、古くから漁業とともに歩んできた。

図1 位置図



2 漁業の概要

寒流の親潮と暖流の黒潮がぶつかる世界三大漁場の1つである三陸沖を背景に、すくい網、いかつり等の漁船漁業と日本一の生産高を誇るホヤの他、ホタテ、イワガキなどの養殖業、そしてアワビやウニ等の採介藻漁業が行われており、地区の漁業生産額は年間5億円程度となっている。また、昔は大波をかぶっていた寄磯漁港も広域漁港整備事業により整備され、漁業者の安全な暮らしを支えている。最近では、寄磯地区の小中学生が、家業である漁業への参加・体験、そして将来への意気込み等をテーマにした「みやぎの海の子作文」で5つの賞を受賞するなど、後継者も確実に育ちつつある。

3 研究グループの組織と運営

寄磯漁協女性部は、昭和35年5月に宮城県沿岸に大きな漁業被害をもたらした「チリ地震津波」襲来の年に組織された。現在は部長・副部長・会計が各1名、班長5名の

計8名の役員を筆頭に50名の部員が在籍している。

当女性部では親組織である宮城県漁協女性部連絡協議会（以下「県漁女連」）の基本方針である、①組織の強化と活性化、②水産物の消費拡大、③健康なくらしと環境保全運動の推進、④漁協全利用と生活設計の推進をよりどころに、特に③の環境保全運動と④の貯蓄推進・共済普及等に力を入れて長期にわたり活動してきた。活動費については、漁家の財政難を背景に部員からの会費の徴収が困難であったことから、親組合からの助成金及び女性部幹旋品の売上を活動費に充てている。

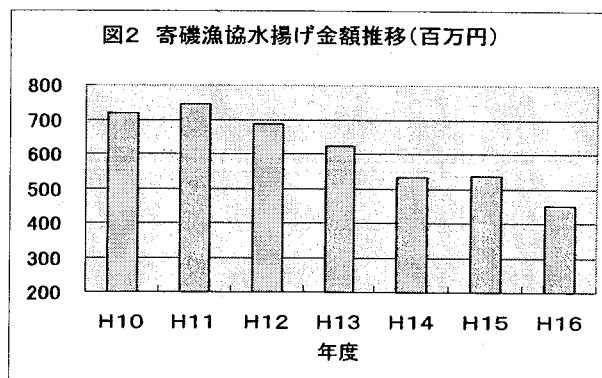
4 研究・実践活動取組課題選定の動機

①環境に配慮した生活（県漁女連の③④に該当）

当地区では、20年程前に一度合成洗剤追放運動として「わかしお石鹸」の普及が行われたが、しばらく低迷していた。しかし、ここ数年磯焼けや海況変化による磯根資源の減少が問題となり、これを機に環境への意識が高まってきている。当女性部では、平成15年から浜の清掃活動を行っており、マナーの悪い人々によるゴミのポイ捨てが少なくなるなど一定の成果を上げている。しかし、不定期な点、またゴミが溜まってから回収する点で、なかなか定着しなかった。そこで私達はもう一度原点に戻って話し合い、その結果、「主婦自ら海と浜を守る運動」として「わかしお石鹸」の普及へ再チャレンジするとともに、清掃活動の定期化を図り、ゴミを回収する作業から一歩進んでゴミを捨てにくい環境作りへ取り組むことにした。

②海に負担をかけない漁業を目指して（県漁女連の②③に該当）

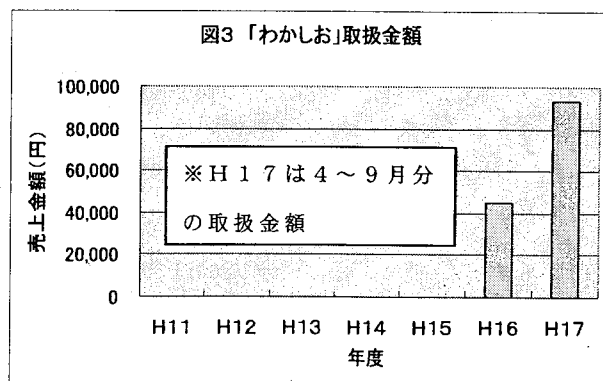
ここ数年の当漁協の水揚げをみると、漁獲量の減少、魚価の低迷等を受け、年々減少傾向にある（図2）。また、養殖物の水揚げ・加工の際に出るシウリ貝やホタテのヒモ等の邪魔物は自家消費でいくらかは利用されるものの、ほとんどはゴミとして処分されていた。このことを受けて女性部では、寄磯で採れる水産物とともにゴミとして処分されている未利用食材に目をつけ、これを有効活用し、前浜物をPRしつつ、できるだけ漁家にも海にも負担をかけない体制づくりに取り組むことにした。



5 研究・実践活動状況及び成果（効果）

①環境に配慮した生活

磯焼け問題や海況変化により、「私達の海が悲鳴を上げている。何とか海の負担を減らし、共存を図ろう。」という意識が芽生え、お互いに声がけしながら「わかしお石鹸」の普及活動を行ったところ、平成16年度は売上が4



万5千円となり、取扱数は県内40女性部の中で最下位から13位まで上昇した。さらに平成17年度は前年度の倍の売上を目標に立て、部員みんなで取り組んでいるが、9月現在ですでに9万4千円の売上となり、目標を達成した(図3)。平成17年度9月現在の中間報告では取扱数は県内で5位まで上昇しており、さらに部員1人当たりの取扱い割合は県内第2位となっている。

一方、不定期だった清掃活動を月1回定期的に行い、生活の一部として住民の意識の中に浸透させるよう努力した。地元の小中学生と一緒に浜清掃やきれいな海作り看板の設置を行うなど地域ぐるみでの活動も心がけ、その結果、目にとまるゴミも少なくなり、当初の目標であったゴミの捨てにくい環境ができあがった。しかし、今度は「漁民センターの周辺や新しくできた海岸公園が殺風景だ。物寂しい。」という話が出され、そこで清掃活動を「花いっぱい運動」に発展させ、この地区を訪れる人やこの地区に住んでいる人が年中心温まるようにセンターと公園の周辺に50個余りの鉢植えを設置し、年3回花の植え替え作業を行った。

②海に負担をかけない漁業を目指して

前浜物のPRと未利用食材の有効活用を目標に、平成16年度は「おしかまるごと浜っこまつり」や「生命のまつり」などのイベントに参加した。イベントには、寄磯浜で採れたホヤやカキ、そして養殖物の水揚げ・加工過程で出るシウリ貝やホタテのヒモなどを食材とした女性部オリジナルメニューを出品した。当日は夫たちの協力を得ながら朝早くから準備を開始し、会場設営から搬入・販売まで、みんな協力して行った。その甲斐あって参加者からは「シウリ汁なんてしばらく食べていない。昔懐かしい味。」という声や、「生のホヤは食べられないが、蒸せば食べられる。」という声を頂くなど、心温まる声にとっても励まされた。まずは消費者のニーズをつかむことが目標であったので、価格も安く設定し、利益はあまり期待していなかったが、メニューが好評だったこともあり、イベントの収支は人件費を含めても浜っこまつりで6万8千円の黒字、生命のまつりで3万5千円の黒字となった(表1, 2)。

この成果に一定の達成感を得た私達は、さらにこの努力を浜の未来につなげようと、イベントで得られた経験を生かし、女性部独自のレシピ作りに取り組んだ。そして、寄磯漁協女性部のオリジナルレシピがいくつか完成した。

表1 「牡鹿まるごと浜っこまつり」収支決算書

① 収入の部		売上合計	323,800
② 支出の部		支出合計	255,205
内訳(1)仕入	岩がき	@120×265枚	31,800
	ほや大	@21.5×4000個	86,000
	ほや小	@10×1200個	12,000
	いか	@1500×45箱	67,500
(2)諸経費	箱・袋代他		17,905
(3)人件費		@5000×8人	40,000
③ 収支差引	利益		68,595

表2「生命のまつり 2004」収支決算書

① 収入の部	売上		150,136
② 支出の部			
(1) 仕入	ホヤ	@60×215kg	12,900
	イカ	@2310×3c/s	6,930
(2) 諸経費	調味料・梱包材他		30,316
	運搬費		9,700
	弁当代(14名)		14,700
(3) 人件費		@5000×8人	40,000
		支出合計	114,546
③ 収支差引	利益		35,590

6 波及効果

浜では「花いっぱい運動」に発展した環境保全活動が少しずつ全体に波及していき、今では浜の各家々が自宅前にプランターを設置するようになった。高齢者の方々や小中学生等からも喜びの声が聞かれ、心豊かな生活を送れる花いっぱいの浜となってきている。また、地元からの要望もあり、来春には地元の漁神様である神社の周辺へ桜の苗の植樹も予定している。この桜が多くの人々を



花いっぱい運動

楽しませるのは少し先のことになるが、私達の活動もこの桜とともに大きくなっていければと願っている。一方、わかしお石鹼の普及をするようになってから、磯焼けだった浜にワカメ、コンブ等が生えてきたという話も出ている。この主な原因が女性部のわかしお石鹼普及活動であるとは言い難いが、浜の希望の光としてうれしく受け止めている。

一方、様々なイベントで試行錯誤を繰り返して完成させた地場産品の加工レシピ『蒸しホヤ』(H16作成)と『芽んこいヒジキ』(H17作成)においては、全国の消費者市場へ製品を出荷している「(有)おしか水産公社」や地産地消を目的に設立された「石巻しみん市場」を通して新たな流通経路にのせることができた。これはまさに私達女性部の努力が実を結んだものと自負している。また、今まで利用していなかったシウリ



蒸しホヤ

貝を食材とした「シウリ汁」、「シウリ飯」やホタテのヒモを利用した「さつま揚げ」などもイベントで高い評価を受けており、今後の販路拡大が望まれている。

さらに、これらの活動の結果、平成17年度から親組合の総会に当女性部長が招待されるようになった。このことは、男女共同参画への新たな1歩であり、また当女性部の地位向上につながるものである。部員一同大変喜んでい



シウリ飯

7 今後の課題や計画と問題点

当浜におけるわかしお石鹼の普及率の向上は図られたが、隣接する地域や漁業者以外の一般家庭ではまだ普及率が低い。海はみんなの協力がなければ守っていくことができない。今後は当浜はもちろんのこと、これらの地域の人々にも普及していく必要があると考えている。これと同時に、清掃活動から発展させた「花いっぱい運動」についても継続的に行ってどんどん運動を広げていき、「次は牡鹿半島全体を花いっぱいにしよう！」と目標を大きく持って活動していきたいと思う。

「(有)おしか水産公社」へのレシピの提供や「石巻しみん市場」への加工品の出荷は、前浜物の消費拡大につながり、ひいては将来の漁家所得の向上につながる。しかしながら、イベントで高い評価を受けていて流通にのっていない加工品もたくさんある。私達寄磯漁協女性部では、関係機関、団体、そして家庭内での協力を得ながら、今後もこれらのPRに取り組むとともに、ホタテ・フノリ・マツモ等の様々な前浜物食材を用いて旬ごとの女性部ブランドの確立を目指していきたいと考えている。

そして、これらの活動を通して海に負担をかけない漁業を実現し、寄磯の海がこれから先も宝の海となるよう頑張りたい。



寄磯漁協女性部現役員